

ダニエル・デ・レオンと米国社会労働党

野村, 達朗

<https://doi.org/10.15017/2334038>

出版情報 : 史淵. 77, pp.97-121, 1958-12-10. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :



ダニエル・デ・レオンと米国社会労働党

野村達朗

一、序 論

米国社会主義は何故敗退したのだろうか。この問題については米国特有の社会的諸条件と並んで米国社会主義運動の特徵的な脆弱性が主体的条件として考慮されねばならない。本論は九〇年代における米国社会主義の最高指導者であり、それ以後も左派の思想と戦術、特にその欠陥―セクト主義とサンディカリスト的傾向―に甚大な影響を与え、米国社会主義運動の運命を決定する一因となつたデ・レオンを考察の対象とすることによつて米国社会主義政党的性格の一面を把握せんとするものである。

初期社労党が大部分ドイツ系移民から構成されて、一般米人との接触も僅かな限られたサークルにすぎなかつたことは周知の事実であるが、九〇年デ・レオンが入党して指導権を掌握するや、党は活動的な新時代に入つた。党機関紙「The People」の編集者として彼は H. Vogt 及び L. Sanial と、更に H. Kuhn と結んで党指導部を構成し、「党組織の上に重くたれこめていた」ラサール派政治行動分子とマルクス派労働組合分子との論争を克服して「革命的社會主義は政治權力を求めて苛責なく斗争せねばならない」との命題の上に、正副大統領及び上院の廃止を主張していた党綱領を改正し、党をして九二年始めて大統領選挙戦―国家權力を求めるプロレタリアートの独立的政治運動に入らせただけである。党の政

治的獲得は僅少であり、到底既存政党を狼狽させる如きものではなかつたが、得票数の着実な増加は黨員に喜ばしい期待を抱かせた。かくしてデ・レオンは九四年までに党活動の *normal part* として選挙への参加を確定させたのであり、九六年の大統領戦では九二年の二一、五二票に対して三六、二七五票を得、更に党得票数は九七年五五、五五〇、九八年八二、二〇四と飛躍を見せ、党支部数八九年の約七〇も九八年には三四〇にと増え、又経済分野でも活潑な労組活動がデ・レオン指導下に展開された。⁽³⁾

かかる党活動の活潑性にも拘らず、九九年には致命的分裂が訪れた。デ・レオンの政策と指導が黨員に対して新しい問題を提起したからである。「階級斗争の上に強固に基き、資本主義との妥協を産業戦においてであれ、政治行動においてであれ、全く拒絶する真に革命的な党」たらしめんとしたデ・レオン指導部は全ゆるブチ・ブル的改革運動との協働を拒絶し、党外の非科学的社会主義に反対し、純粹單純労組に対抗して二重組合政策を強行すると同時に、*People* 紙を通じて激しい党内反対派攻撃を展開した。そして個人攻撃の激しさにおいてデ・レオンに匹敵する者は殆んど居なかつたと云われる。政策論争は反対派の攻撃にとどまらず、「党の官僚的指導部」としてのデ・レオン派は反対派を容赦なく除名した。そして彼のセクト的政策と独善的指導に対する不満が増大するにつれて、執行部の精力は異端の追放、反抗的支部の停止と再組織化、社会主義諸紙の破壊に費され、党内は陰謀で乱れ、遂には執行部自体が「あたかも党内で機能しつつある地下組織の如く」なり下つたと云われる。そして M. Hillquit の指導下に九九年党内反対派の策動が成功し、デ・レオン派は罷免されて新幹部団が選出されたが、デ・レオンはこの決定を承認せず、反対派を「カンガルー」と攻撃して党は分裂した。論争の主問題は二重組合主義にあつたが、デ・レオン体制に対する不満が背景にあつたことは S. T. & L. A. の積極的支持者すら Hillquit 派に組した場合があつたことから明らかである。⁽⁴⁾ この Hillquit 派社労党は Debs 及び Berger の卒る社会民主党と合同して一九〇〇年社会党を形成するが、以後米国社会主義の指導権は社会党に移り、

デ・レオンの党は小セクトに転落する。

所でデ・レオンの政策と指導に対しては Hillquit は勿論、多くの研究者、特に W. Foster や P. Foner の如きマルクス主義のドグマ化と運動のセクト化から来る弊害を痛感しているレーニン主義者によつて鋭い批判が投げかけられている。例えば Foster は、デ・レオンがどんな事情の下でも社労党を政治的に支持することだけを唱えてマルクス主義者を大衆的諸運動から孤立させ、更に党内民主主義の蹂躪によつて社会主義運動の建設的諸要素を党から遠ざけたとして彼のセクト的過失の重大性を正当にも強調する。

しかし彼らの批判の正当さにも拘らず、従来のデ・レオン評価は一種の政治批判として彼の果たした役割の否定的側面のみを強調したきらいがある。そしてその批判の視角如何によつてはレーニン主義者の間にも全く対立する見解が生じている。例えば彼の教条主義とセクト性を攻撃して Foster は「デ・レオンは戦略・戦術の重要問題全体に亘つてマルクス主義から大巾に外れていた」と発言するのに対し、デ・レオンのサンディカリスト的観念を問題とする Brecht は「九〇年代においてデ・レオンは多くの問題について正しいマルクス主義的な立場に立つていた。……デ・レオンは社労党内の改良主義と斗い、厳格な党規律と党によつて決定された原則を擁護した。彼は階級協調主義の擁護者と党規律の違反者に断乎として反対し、彼らを党から追放し」又「エンゲルスが屢々批判した社労党の分派的フラクションをなくそうと努めた」と説明して、この限りでは彼を擁護する⁽³⁾。更に党内外の反デ・レオン派を糾合して成立した社会党がそのデ・レオンのセクト性への反対にも拘らず、やがてその弱体性を暴露せざるを得なかつたことが考慮されるべきであらう。デ・レオン批判がセクト主義の対極としての無原則統一論とも云うべきものに導いたからに他ならない。本論はデ・レオンのセクト的諸傾向が何を意図して打ち出されたのかを究明することによつて彼に正当な歴史的評価を与え、更には米国社会主義運動に内在した脆弱性の一端を明らかにせんとするものである⁽⁶⁾。

二、中産階級 reformists の排除

デ・レオンの思考において著しいのは社会主義のプロレタリア的性格と改革諸運動の中産階級の性格とを峻別する態度である。このことは彼の革命的行動の十原則の中に「全ゆるブルジョアの慣習の完全な破壊」が挙げられていることから明らかである。ここで考慮さるべきことはプロレタリア社会主義の發展に猛烈な抵抗をする中産階級的意識という米國の精神的風土であらう。

しかし彼はインテリゲンチヤとして出発し中産階級的諸運動への参加によつて彼の政治生活を開始した。彼は一八五二年蘭領西インドのキュラソー島に軍医の子として生れ、青年時代はヨーロッパ最初ドイツの Hildesheim の高等学校、次いでオランダのライデン大学で教育を受け、語学に堪能で歴史、哲学及び数学について広く読んでいた。七二年ニューヨークに渡り、キューバの革命家とグループを作つてスペイン語新聞の編集に當つたが、やがてコロンビア大学に入り、七八年優等で卒業し、八三年には同大学國際法講師に任ぜられ、ラテン・アメリカ外交を講じた。八九年彼が同大学を追われ、マルクス主義者となつた時、彼は卓絶せる知性を以て党内の社会主義者を魅了したのであつた。彼は professor without a professorship としてマルクス理論については当時並ぶ者なき理解を示したけれども、彼にはその理解を、大衆を組織し指導するための柔軟な戦術に展開する能力に欠けていた。彼の「傲慢な」指導は彼のこの欠陥の裏返しにすぎない。そして「無情なまでに論理的なプログラムに対する信頼」を労働者に要求するという彼の原則の純粹性への執着は彼のインテリゲンチヤ的抽象的視角から由来したものであり、彼のこの性格が彼のセクト主義の前提となつてゐることも疑いはない。

プロレタリア運動と中産階級運動を峻別する態度は彼が社労党入党に踏み切る時に確立されたと推定される。彼が最初

に国内政治運動に参加したのは八六年のヘンリー・ジョージ運動であつた。彼はジョージを指名した委員の一人であり、又幾度も彼のために演壇に立つた。次いでベラムーの「顧りみれば」を読んでナシヨナリストとなつた。かかる中産階級運動の履歴をもつ彼が中産階級運動に激しい攻撃をあげせるに至るのは何故だろうか。それは彼の国内社会問題についての関心の出発点が労働問題にあつたからに他ならない。一般に彼の社会的関心は八六年の八時間労働運動の間に、労働者に対する警察の残虐行為に憤激したことにあると言われている。ヘイマーケット・アナキスト達に対する死刑宣告に抗議して彼がニュー・ヨークのクーパー・ユニオン・ホールで労働者相手に演説した時、彼はジョージ指名委員会の *respectable company* とは全く異質の *less reputable surrounding* の中に入つていたのであり、従つて彼のジョージ運動参加は労働者救済という彼の関心からなされたものと思われる。⁽⁹⁾ 所がジョージ運動の成り行きは彼にその運動の限界を鋭く感じさせたに違いない。最初ジョージの *United Labor party* の綱領は社労党の直接要求から実質上構成され、「労働者階級の解放は労働者階級自身によつてのみ達成され得る」という第一インターのスローガンで結ばれていた。しかしジョージの指名と共に綱領は若干の工場・労働立法の要求を含みながらも彼の土地理論に立脚した様々の土地・貨幣・租税改革を要求する全く異なる趣旨の文書に書き代えられ、選挙戦後の *“Land and Labor clubs”* の全国的組織化——クラブは若干の労働者を含んだとは云え自由職業家と実業家によつて支配された——によつて始められたのは「労働者の全問題から単一税に運動を転ずる仕事」であつた。党内における中産階級要素の影響力の増大は労働者・社会主義者との衝突を不可避ならしめ、八七年シラキューズ大会で社会主義代議員は遂に排除された。その目的はジョージの言に明白である。「社会主義者の除名は中産階級及び大資本家を獲得せんとする努力の本質的部分をなす。社会主義者を独立的政治運動から引き抜くことによつて労働党は中産階級、雇主及び農民の支持に価するものとならう」と。労働党はエンゲルスの期待した労働者の独自の政治的結集どころか、中産階級の政党に転化したのである。⁽¹⁰⁾ かかる運動が労働者の票を求めて労働

働者の不満を利用する場合でも、一度び運動が確立するや労働者の要求は失われて中産階級と資本家との同盟に動いていくという事実は、社労黨員にとつてと同様にデ・レオンにとつても苦い経験だつたのではなからうか。かくして彼は八八年労働騎士団に加盟し、更にベラミーを読んで社会主義への眼を開いていく。しかし死刑されたアナキストを弁護した彼にとつて、赤旗を振る過激な労働者を蛇蝎の如く嫌うベラミーの思想は彼の思想的発展の踏み台でしかなかつた。特にナシヨナリストが労働者解放のための政治的プログラムを採択し得なかつたことは彼にナシヨナリズムの価値を疑わしめた。従つて労働者に対する彼の関心は論理的追求に熱心な彼の学究的精神と相俟つて、彼が広く読み始めていたマルクス理論に到達せざるを得なかつた。博学な三十八才の弁護士・博士・前コロンビア大学講師にとつて社労党への入党は「ルビコンの渡河」であつた。以後彼はイースト・サイド共同住宅での文字通り貧困な生活に堪えていく⁽¹²⁾。かくして中産階級的諸運動との協働を拒絶し、党内への中産階級的意識の浸透を拒絶する彼の出発点は彼の政治活動初期における諸改革運動の偽瞞性——労働者運動との利害対立——の確認にあつたと考えられる。

更にデ・レオンの指導下に社労党が過去の政策と実践から鋭く外れ始めるのは何故だろうか。デ・レオンが「労働者は前進せる綱領に立脚する賃金労働者の政党によつてのみ政治的に代表され得る」と主張して、党による政治権力掌握をめざして大統領選挙戦参加に踏み切つたのは、彼が騎士団の人民党支持に反対して「労働者階級がお互いに分裂し、その敵を支持するという憐むべき光景は充分に長く目撃された」と述べた如く、彼の入党前の社労党——及び労働者——の政治活動がグリーンバック運動やジョージ運動の支持に局限されて、しかもそれら運動の指導者によつて排除され、更にはそれらの中産階級的運動が結局は保守的方向に動くことによつて、社会主義者の fusion politics の努力が無効と化するというプロセスを切断し、そうすることによつて労働者を誤つたイデオロギーに染まらせないようにするという必要性からだつたと考えられる。従つて社労黨員は、ジョージ運動における八七年の敗北を fusion politics の無益性を証明するもの

と考え、九〇年代にはデ・レオンに従つて独立的政治運動のコースから外れることはなかつたのである。¹⁴

だから人民党運動に対するデ・レオンの全く冷淡な態度の理由がそのブルジョアの性格にあつたのは当然であつた。特に人民党指導部は屢々想定されるよりも本来的に保守的であり、又人民党の理念は社会主義と対立していた。その政策でも、通貨価値低落を意味する銀貨自由鑄造が賃労働者の利害と対立することがデ・レオンによつて明確に主張された。故に彼は社労党の全支部に人民党の「中産階級的腐敗」と何ら関係を持たないようにと勧告した。従つて彼には労働同盟の観点は全く欠如していた。この原因の一つは米國農民が強度に帯びていたブルジョアの性格に求められようが、更に人民党を支持した社会主義者又は労働者が日和見的又はおくれた意識に立つものだつたということが、デ・レオンをして農民運動との協働の危険性を感じせしめたように思われる。当時の状況にあつては社会主義者が農民を把えるのではなく、逆に農民が社会主義者をとらえてしまう危険性の方が大きかつたと云わねばなるまい。そして労働問題の基本的解決方法が人民党との *fusion politics* によつて曖昧とされ、労働者に幻想を振りまくことになる危険性を彼は警告する。それは必然的に社会主義者と労働者の「腐敗」を意味していたから。次に考えるべきは農民消滅論であらう。九三年の社労党大会は人民党を「近代的生産制度によつて発展した経済諸力の作用によつて所有剝奪と消滅とに宿命づけられている」階級の存続を求めるものとして「寡頭制支配と同様に、プロレタリアートの利益と目的にとつて対立的」であると非難したが、デ・レオンも農民の真の目的がそのブルジョアの立場を維持することにあるが故に、かかる農民の不満の表現たる人民党は本質的に反動的であると考えた。ポピュリズムの発生は米國資本主義の矛盾が遂に農民まで把えるに至つたことを示すものとして歓迎されたが、農民が賃労働者に転化する途を農民改革の支持によつて遅らせることは社会主義の到来を遅らせることになるというのが、人民党支持反対の一論拠だつた。かかる農民観が当時の米國マルクス主義の理論的水準でもあつたのである。そして人民党が保守的方向に動き、九六年民主党に吸収されて消滅するや、デ・レオンはこれを *fusion*

politics 拒絶の正しさの証明として歓迎した。⁽¹⁵⁾

キリスト教社会主義、フェビアン主義、Wayland の Grass-root-Socialism に対しても彼は極めて冷淡だったのであるが、⁽¹⁶⁾これら改革運動に対する彼の態度を一貫して流れているのは、党が全国的政治運動に入つた以上、対抗的運動として把握し、中産階級的諸運動との fusion politics によつて党の革命的原則が曲げられ、更に労働者に間違つた幻想を与えることを嫌悪する態度であり、彼は中産階級との結合を排してプロレタリア運動としての党の政治的純潔性を危くすることを拒絶したのである。故に彼は革命的労組運動の創設に専念したのであるが、同時にかかる中産階級運動の崩壊によつて労働者が中産階級意識の影響を脱して社労党に引きつけられると考えた。従つて党の課題はこれら運動の解体が起つている間に、党の純粋性を保持することであつた。⁽¹⁷⁾

所でこれら改革運動の抬頭によつて社会問題の政治的解決の必要性に目覺めた諸分子は彼らの運動の崩壊によつて、或いはそれら運動の限界を感じて社会主義支持に向う者が漸増した。特に人民党の崩壊は他の急進的政治組織によつて満たさるべき真空状態を残した。社会民主党の発足もこのことを背景とする。デ・レオンは人民党を統制している反動家に誤導された急進派が中産階級運動を嫌惡の情を以て放棄し、國際社会主義の旗の下に參ずるだろうと期待したが、⁽¹⁸⁾事實、人民党崩壊を機に党支持数も増加し、同時にこれら急進派が党内に流入することになつた。しかし新改宗者の流入は党に新たな問題を投げかけるものであつた。党内古參者はこの流入を混乱せる感情で眺めざるを得なかつた。遂に久しく待望していた英語を話す真の米國人が入党しつつある。しかし何たる社会主義者だ、新參者は入党申込書に署名して支部に入り、自らを社会主義者だと考えるだろう。彼らは「地獄に一マイルつぎを当てる」よりも馬鹿げた考えを持ち込むと。サン・フランシスコの社会主義者達が最も簡単な社会主義テストで平均十八点を得たことを嘆いた E. Hecht は彼らが「食用蛙が高貴な榮譽について知つている以上のことは社会主義について何も知らない」とデ・レオンに書き送つた。⁽¹⁹⁾ 科学的社會主

義の原理について無知な米人の流入は彼らを社会問題に覚醒させた改革諸運動の中産階級的意識と理論を引きつづけていたのであり、彼らの流入は党の科学的、革命的原則の水ましという危険性を孕んでいた。従つて「党指導部は労働者階級及び中産階級の遅れた部分との結合を通じて必ずやつて来るところの腐敗から免れるために苦勞した」のであり、デ・レオンの異端狩りは階級斗争理論をためらう中産階級改革家を党から切り離すことを目的としていたのである。「社労党は政党ではない。それは単にマルクスの資本論をその聖書として採用した政治的セクトにすぎない。全ての者がマルクスと一緒に学校で学んだかの如くいつもマルクスについて語っている社労党」と Berger に批判された程、デ・レオン指導部がマルクス主義にドグマ的に執着し、正統的社会主義の原則と戦術に厳密に従わない党内外の全ゆる者に向つて苛責ない攻撃を挑んだのは、中産階級的イデオロギーの滲透による党の革命性喪失を警戒したからであり、彼による人身攻撃の粗暴性も「原理の昔ながらの純粹性を汚そうと脅した人々を悪評におとすための武器」として把えられねばならない。更に People 紙の恒常的読者のみが「真に安全な」社会主義者だと主張されたのは同紙以外の諸紙、例えば Labor 紙による党内への中産階級意識の浸透を阻止せんとするものだった。従つて、例えば中西部における党内不満の中心地クリーヴランド支部が党外改革運動との協力という強い傾向をもつたのを、デ・レオンが非難して同支部の停止を計つたのに対し、党苦情委員会は社会主義の拡大は党組織化よりも急速であり、同支部は社会主義者ではないにしても社会主義に同情的な労働者との融合を計つたのだと逆襲した。これに対してデ・レオンはかかる行動が未来にとつての重大な紛糾に満ちており、むしろ危険であると警告する。

従つて党指導部が米国労働者の大集団を指導・教育することよりも、組織を非科学的観念で汚されないようすることにならずと大きな関心を払つたという Kipnis の指摘は正当であらう。しかし米国のプロレタリア社会主義が英国のそれと異つてマルクス主義の性格を獲得・維持したのは社労党によると Sweeney が指摘した如く、米国におけるマルクス主義の

革命性維持は強大な中産階級意識の浸透を阻止する党による執拗な努力を必要としたのである。⁽²⁰⁾

三、党組織の性格 — 社会党との比較 —

マルクス主義原則に執着したデ・レオン指導部は同時に、党规律の嚴重な実施を強行して党の決定事項の受諾を拒む者を除名せんとした。「革命が改良か」においてデ・レオンは云う。「要塞の襲撃におけると同様に全ゆる革命運動において事の成否は縦隊の先頭——その確信において極めて強固であり、その原則に極めて健全に基き、その行動において極めて決然たるが故に大衆を引つ張つて胸壁に殺到し塞を占領するところのあの少数者——にかかつてゐる」と。更に党紙論説にて「もしも諸君が諸君自身の一員に党とのいちやつきを許すならば、党外者は或る危機的瞬間に諸君が資本主義に諸君といちやつくのを許すだろうと正当にも信するだろう」と彼は云う。従つて党は少数ではあつてもあくまでも党规律を守る革命家によつて構成されねばならないのである。かくしてデ・レオンの指導下に党は高度に集中化された組織形態をとり、Foster はこれを「かつて社労党においてデ・レオンが支配して行つた息がつまるような超中央集権主義の体験」と評している。レーニンの「新しい型の党」にその典型をみた前衛党と同じ“Authoritarian variety of party type”の萌芽として把えることも出来よう。デ・レオン指導部は社会主義新参者に対しても党要求の嚴正さを弛めようとはしなかつた。

しかしかかる方針は党と大衆との接觸を犠牲にせざるを得ない。社労党の分裂は單に二重組合主義とデ・レオンの独裁的指導を理由とするものではなかつた。デ・レオン体制下に党外に排除され、又は党外の諸組織に留まつていた社会主義者と統合し、更に党を大衆化する必要性を鋭く感じていた Hillquit によれば「もしも党が社会主義運動にてヘゲモニーを維持せんと欲するならば根本的改革が必要となつてゐた」⁽²³⁾そこでこの「根本的改革」によつて成立する社会党の性格

を検討しよう。

「社会党の創設は社会主義運動を広汎な大衆と接触させた点で一つの進歩的な発展であつた」と Foster が云う如く、それは社労党の組織化よりも急速だつた社会主義的傾向の拡大に影響された民衆を引きつけようとする、つまり社会主義の大衆化への努力の所産であつた。この努力に対応して党は民主的党タイプの典型となつた。「一九二〇年以後の左翼政治組織の性質の故に米国人は全ての左翼政治組織を厳格な党則をもつ政治的セクト、その理論的純粋性に注意を怠らぬ純理主義者の集団と見做す傾向がある。だが初期の精力的諸年における社会党は確かにそうではなかつた」と Shannon は云う。事実、党は過去の諸々の改革運動から改宗した様々の異質的要素を包含し、それらの上に修正主義が広汎な影響を与えることになる。その結果、極端な分権的党構造が採択され、党内で幾多の独立紙が発行されて、イデオロギー上の統合の印は殆んどなかつた。この組織型がそれを取りまく強力な中産階級的伝統の中で党をして「数のためには規律を犠牲にし、政治上の直接的成功のためには革命的目的を犠牲にせんとする大衆政党」に転落せしめるのは容易なことだつた。Shannon はこの多様性の中にこそ党の強さが存在したと主張するが、⁽²⁴⁾同時にその中にこそ党の弱さも存在したのではなかろうか。

党右派の指導者 Berger の理論は革新主義者の反独占・良き政府改革の理論に類似し、社労党外部の、特に社会民主党の思想形成に貢献したが、社労党のマルクス主義信奉を攻撃した彼はベルンシュタイン以前に a rather crude version of many of Bernstein's revisions を作り上げていたと云われる。そして社会党設立後は米国社会主義の中に修正主義をたたき込むことに邁進し、アメリカのベルンシュタインと呼ばれることを自慢するに至つた。彼に卒られた右派は社会主義の決定的樹立を問題とすることなく、修正主義者独特の云い廻しで「社会主義は部分的に現在ここにある、それは毎日毎日やつて来つつある」と主張するが、彼らの云う社会主義の若干の例とは公共事業会社の配当金制限、警察と郵

便局、電車の市所有制等にすぎなかつた。かかる右派が社会主義の階級運動としての性格を否定し、階級斗争に反対し、労働者に敵対的な立場に立つに至るのは当然であつた。社労党外部に発足した社会民主党の性格は Berger の思想によつて色濃く染められていたのである。⁽²⁵⁾

しかし社会党の指導権を掌握していくのは社労党反デ・レオン派の系譜をひく Hillquit 指導下の中央派であつた。デ・レオンに反対した主勢力の性格を彼らの理論が良く示している。彼らによれば、労働者解放を目的とした党の機能は政治行動にあるとされたが、それは資本制国家に対する労働者の全ての斗争の指導というマルクス主義の伝統的政治行動を意味せず、社会主義者を公職に選出することだけを意味した。只、彼らは国家社会主義者とは異り、「我々は政治が依存しているところの制度に反対して煽動するためにのみ政治に入る」とか「我々はそれを破壊するためにのみ国家に入る」と主張された如く、社会主義は現存国家機能の拡大によつてではなく、プロレタリアートの或る種の革命的行動を通じて達成されると考えた。だがこの行動が何を意味するかは理論化されなかつたのであり、従つて Hillquit 派の政治行動論では革命の見通しが喪失されてしまつて注意されねばならない。「この矛盾は実践において理論を無視することによつて解決された」が、やがて彼らの指導下に社会党の活動は公職への選出にますます集中され、社会主義者の選出と社会主義の達成とが同意義であるということが「公には否定されたとしても暗黙の内に」了解されるようになる。かくして Kipnis に従えば、彼らの社会主義理論は社会党成立前に、公職への党員選出及び資本主義的 “excesses” の改革を党の唯一の目標とする日和見主義に途を譲る徴候をすでに示していたのである。⁽²⁶⁾

投票獲得への社会党の集中は、党得票数が改革諸運動との競争によつて一九〇五、〇六年低下するや、労働者を組織・指導するという困難な課業を避けて、中産階級にアピールすることによつて選挙の成功を確保しようとの安易な方針を打ち出させ、中央派・右派連携が成立する。⁽²⁷⁾そして党が最早や革命的労働者組織ではなくなつたと非難する左派との対立が

激化するが、やがて一二年には Haywood を中心とする左派は大量的に党から追放された。民主的党タイプとして社会党は党内フラクシヨンの存在を許したとは云え、左派に対してはその追放を行つたのである。

従つて社会労働党の分裂、社会民主党との合同による社会党の成立は Shannon も指摘する如く「全体としてヨリ保守的な社会主義に向う運動」という側面を持つていたのであり、Hilquit 派の政治的コースは社会主義政党を諸派の寄合世帯たらしめることによつて必然的に改良主義政党化への途を開くものだった。デ・レオンはこの危険性を党規律の厳守と日和見分子の追放によつて阻止し、党の革命的性格を守らうとしたのだと云わねばならない。故にデ・レオンが Hillquit 派との分裂を積極的達成と見做し、それによつて党が弱体な宣伝機関から a party indeed に転換した最終的歩みと考へたのは、日和見分子から解放されて党が始めて真の効果的革命党となり得ると考へられたからに他ならない。社会民主党という社会主義の新趨勢に対して彼の立場が「昔ながらの」純粋性を守るといふ古さ及び初期マルクス主義特有の極度のドグマ性とセクト性を含んでいたにも拘らず。

四、社会民主主義的趨勢の拒絶

(1) 改良について。デ・レオンの思考において極めて執拗なのは非革命的指導者が集中するに至つた「姑息手段・間に合せ改良」に対する深い不信頼の念である。一九〇〇年彼が直接要求のリストを「活動的で斗争的な社労党を胚芽の社労党と結びつけている臍の緒」と呼び、運動の幼年期に属すると称して党綱領から削除するに至るのは、来るべき革命を指導する準備が出来ている党は資本制の枠内での改良という小つばけな目的のための斗争に専念する必要はないと説明された如く、直接要求(改良)への集中による窮局目標(革命)の忘却を警戒したからに他ならない。「直接要求なるものは非常に危険なものである。何故ならそれは“Sop”又は“palliative”の誘惑にひつかかり易いからである。それは劣

働者救済の敵が労働者階級の眼前に見せびらかそうとしており、資本家階級の労働副官に援助された不用心者が釣られがちなものであるから」と彼は云う。従つて彼にあつては直接要求は窮局目標と conform する限りにおいて斗争するに値すると見做された。⁽³¹⁾

そしてデ・レオンは純粹單純労働指導者が「資本家階級の労働副官」として資本主義制度の中に吸収されていくだろうと指摘したが、同様に社会主義政党における直接要求への没頭が純粹單純政治主義—腐敗又は腐敗への誘致—を示すと考えた。このように彼が直接要求に内包された危険性を強調したのは、労働者によつて獲得された部分的譲歩が「ブルジョア的価値の腐敗的性格」によつて侵蝕されるのではないかという不安に基くのである。⁽³²⁾ 社会党左派も、資本主義の如何なる改革も労働者の状態を改善することによつて革命を遅らせるだけだと主張したが、これら左派の恐れた事態は米國において最も完全に実現されている。従つてデ・レオンのコースとは、英國のブルジョアジーと並んで「労働者を欺瞞し、墮落させ、買収する技術にかけて世界に並ぶものはない」とレーニンに評価された米國ブルジョアジーの「譲歩」を求めて社会主義政党が直接要求への集中によつて「資本主義下の改革運動の水準にまで低下する」という社会民主主義的コースを革命という窮局目標への執着によつて拒絶せんとするものであつたと云うべきだろう。⁽³³⁾

(四) 議会主義について。デ・レオンは革命的社會主義による議會制度の充分な利用を信じ、米國における彼獨特の平和革命方式を理論化したのが、「投票箱に赴いて一片の紙片を取り上げ、それを投げ込んで、それから手をこすりながら、そうすることで何らかの神秘的な鍊金術によつて投票が資本主義制度を終らせて社会主義國家が投票箱の中から仙女の如く立ち現われるだろうと期待して楽しむ男—幻想的政治家」⁽³⁴⁾に対しては輕蔑の念しか持たなかつた。彼によれば「すでに社会党によつて数多く、そして嘆かわしくも例示されている」「純粹單純投票主義」は議會主義白痴病に対するマルクスの警告に反するものであつた。⁽³⁵⁾ 従つて Foster もデ・レオンは「右翼日和見主義に対する苛責ない斗争者であつた。彼の右

翼社会民主主義者に対する攻撃は……政治討論の見本になつた程である」と認めざるを得ない。社会党左派の Debs が「社会主義に投票することは献立表が食事でない以上に社会主義ではない」と云い、Slobodin が「極度の議会主義政策が腐敗家を引きつけ、腐敗を育てている」と党の方針を攻撃したのと同様に、デ・レオンは社会主義政党が選挙と議会主義に集中することによつてブルジョア議会主義政党に転落し、革命党としては腐敗していくという趨勢を拒絶せんとしたのである。そして彼にあつては、大衆が真の社会主義にひきつけられるには、かかる社会民主主義組織が大衆から見放され、革命党によつて打倒されねばならないと考えられた。

(イ) アメリカ化の問題。エンゲルスは米国社会主義者が外国の扮装の全ゆる残存を脱ぎすて、英語を学んで米国人の間に入つていくことの重要性を強調したが、社会主義運動を「アメリカ化」せんとする努力は社労党の全史を通じての活動の基調であつたと Hillquit は云う。デ・レオンの入党自体が「真正のアメリカ人」の入党として歓迎されたが、社労党が「支配的にドイツ人の急進組織」から「アメリカ化されたマルクス主義運動」に自己転換を計つたのは特にデ・レオンの指導下においてであつた。党が大統領選挙戦に乗り出したこと自体、従来の党活動が米国政治界から孤立していた状態を脱して、米国の政治的伝統に調和して、社会主義少数派の見解を一般公衆の面前に示すことを目的としていたのであり、又 *People* 紙は党候補者の「アメリカ的背景」を誇りを以て記し、党の外来的性格という屢々表明された非難に答えた。従つて Fine はデ・レオンが党をアメリカ化するために全力を尽し、多数の英語を話す人々を党内に齎したと主張する。⁽³⁷⁾

しかし反デ・レオン勢力を糾合した社会党もそのアメリカ的性格を誇るのが常であつた。代議員の 45 が米国生れだつたと云われる社会党設立大会では「若いアメリカ生れ代議員の数が屢々話題の種となつた」と云われ、同大会は従来の社会主義者集会とは異つて移住米人によつて支配されることはなかつたのである。しかし社会党における米国の民主的伝統

をマルクス主義と調和させる試みは、党組織型としては民主的党タイプという形をとり、そこにおける米国的伝統とは「階級対立に反対せるものとしての社会的団結を、頑固な純理的決定論よりもむしろ妥協とプラグマティックな give and take を、専断的で権威者的な指導の代りに選択と不同意の個人的自由を強調する」ものだつた。更にそれは「所謂アメリカの実際主義の影響を受けて……すぐ目の前の仕事に殆んど専ら没頭」するという方針を意味し、又党内の constructive socialists にあつては「アメリカの民主的制度を利用すること」は「世界のプロセスが漸進的である」という観念と結びついていた。⁽³⁸⁾

社会党が或る程度のアメリカ化に成功したのに対しデ・レオンの社労党は一般米国人の間に広い影響を与えることは出来なかつた。社会党によつて示された日和見主義に通ずるアメリカ化こそデ・レオンが排撃したものだつたからである。しかし彼は米国の社会的発展がいずれは自らの希望する方向に向うということを確信していたように思われる。米国を最も発達した資本主義国と考えた彼は「マルクス主義の革命的戦術の実行には他のどの国もまだ成熟していない」と結論する。彼の世界観では封建的遺制が社会主義運動の発展を抑制していると考えられた旧世界についての悲観論が米国についての楽観論と釣り合つていたが、この楽観論は、経済的発展の急速性と中世的遺制の欠如の故に「米国人が一度び出発するや、それはそれに比べると欧州の我々が單なる子供にすぎないものとなるようなエネルギーと激しさを以てであろう」というマルクスやエンゲルス以来の楽観論と共に、米国史における諸運動―例えば奴隸制廃止運動―の拾頭の急速性についての洞察、更に「社会主義にとつて最も経済的に成熟している国は必然的に社会主義革命にとつて政治的に最も成熟している国であるという彼の信念」に基いていた。⁽³⁹⁾

従つてデ・レオンにおけるマルクス主義アメリカ化の努力は、社会党によつて許された如き党内への中産階級的諸意識の滲透を拒絶して、米国労働者大衆がやがて示すであらう急速な革命的覚醒に依拠して、その上で米国の経済的・政治的

有利性を社会主義達成に利用せんとするものだった。故にデ・レオンは一般米人のおくれた意識に追隨して一時的成功を得つつも「腐敗」するというコースを拒絶して、党と革命的労働運動との結合を求めていくのである。

(三) 党と組合との関係について。Hillquit 派によるデ・レオンの二重組合主義批判は戦術批判としては正当だったとしても、それは組合に対する中立政策に発展した。彼らによれば、党員は組合運動にも参加すべきであるが、組合内党員の主要課題は組合の建設と指導ではなく、労働者個人個人に社会主義思想を宣伝し、特に投票の知的利用から得られる利益について労働者を啓蒙することに専念することであつた。そして組合は経済斗争にのみその活動を局限すべきとされ、更に「二つの腕の労働運動」という Berger の解剖学的珍説」を中央派は受け入れる。組合内諸紛争に關与することなく、全ての労働者組織を平等の好意を以て見、それらの同情と支持を懇願するという彼らの方針は⁽⁴⁰⁾この場合、資本主義を容認する指導者に組合をゆだね、只投票獲得に専念して、経済的分野における階級斗争戦線の樹立のための斗いを放棄することを意味していた。

社会党における運動の経済的・政治的側面の分離、党活動の議會主義的政治行動への局限に対して、デ・レオンは両側面の結合を説き、労働者階級を日和見的指導者から切り離して、党と組合との密接な結合による階級斗争戦線の展開を求める。この点については別稿に譲らざるを得ないが、注目すべきは彼の革命的産業別組合主義が、日和見的労組幹部と中産階級の改革主義者による社会主義の腐敗を阻止する方策として打ち出されていたことであらう。⁽⁴¹⁾

五、デ・レオン主義の結末

以上、筆者は米国社会主義運動における改良主義的趨勢を拒絶して党の革命性を守ろうとしたデ・レオンの原則的立場を検討してきたのであるが、彼がこの原則から引き出した戦術がマルクス主義から逸脱する点が極めて多かつたことは

Foster & Foner の詳述する通りである。⁽⁴³⁾ 本論はこの点に立ち入る余裕はないが、彼の原則は、党内民主主義の蹂躪、労働者の同盟軍としての農民・中産階級・黒人の諸運動との協働拒絶に歪曲され、アメリカ民衆からの社労党の孤立化に結果し、直接要求の実際の拒否を生み、労働者の日常斗争において社会主義者が、実践的指導を与えて、大衆の信頼を獲得するという絶対的に必要な事柄を無視させ、更に彼によつて展開された二重組合政策は全国的労組々織と社会主義者の間に架橋し得ざるギャップを生ぜしめた。デ・レオンのかかるセクト的戦術から脱却するために社会党の成立は歴史的必然となつたのである。そして社会党の成立によつて社労党は米国大衆からのみならず社会主義運動からも浮き上つた存在になり、党は前衛党としての歴史的課題を遂行するのに遂に破綻した。

以後党は政党としての機能を喪失し煽動と教育の機関とならざるを得なかつた。それと共に黨員の離脱も著しくなり、⁽⁴³⁾ デ・レオンは党の将来についての彼の信頼を放棄せんばかりとなる。一九〇七年の「政治に関して」というパンフレットは米国社会主義の発展についての三つの仮説を提出している。社会党内の正しい分子が党の統制を掌握して社労党と合同するか、社会党内のこれらの要素が社労党に吸収されるか、或いは I・W・W・がそれ自身の政治的反映を投ずるかの三である。ともかく現存の社労党を越えて米国の革命党はこれから樹立さるべきだと彼は考えたのである。⁽⁴⁴⁾ ここにおける党についての確信のぐらつきは悲劇的であつた。同じことは革命党としての性格を喪失した社会党の左派についても言える。デ・レオンと Haywood を中心とする社会主義左派が一九〇四―〇五年にサンディカリズム的思想を展開し始めるのはかかる両党の事情に由来すると考えられる。かくして彼らは I・W・W・活動に没頭していく。この I・W・W・時代におけるデ・レオンの革命理論は資本主義制度を廃絶し、雇主を閉め出して社会主義制度を樹立できるのは組合であり、革命後党は解消して、新社会の骨格を構成すべき産業別組合に全権能を譲るべきことを説き、⁽⁴⁵⁾ 強度のサンディカリズムの性格をおびるのである。しかし彼は背景に、弧立したとは云え革命を目的とする党をもっているので、資本主義的国

家機構を掌握して革命を開始し政治的國家を廢絶する機能を党に与えたのである。だが社会党左派はその背後にかかる党を持たない。故に Haywood 等の産業社会主義者にあつては革命における党の役割は殆んど全く否定され、ゼネ・ストが革命の手段となり、完全にサンディカリズムに移行し、党より除名されるにいたる。

かくして社会主義左派において前衛党の觀念は喪失されてしまつた。そして中央派・右派の指導權の下に社会党は投票獲得機関に転落してしまふ。デブスは左派と中央派の間を動揺し、むしろ孤立した存在を続ける。米國における社会主義運動の決定的な脆弱性の一因はかかる点に存在した。敵意ある周囲との苦斗の中で革命的マルクス主義に立つた政策を展開すべき前衛党という觀念が維持されたならば、米國社会主義はあれ程の脆い敗退よりは示さなかつたのではなからうか。かかる事態を救い得たのはレーニン主義の輸入でしかなかつた。

マルクス主義の革命性を保持せんとするデ・レオンにおける原則、革命党という彼の貴重な觀念は、彼の政策のセクト主義の故に崩壊し、又社会党にあつては、彼のセクト性に対する反撃が社会民主主義化への途を開いた。更に両党の政治的統合の実現を妨げたのも彼のドグマ的指導に対する社会党左派の反感であつた。⁽⁴⁶⁾そしてこのセクト性の個人的原因は、大衆を抽象的集團としてしかみない彼のインテリゲンチヤ的視角にあつた。大衆の性格をよく理解していたのはデブスであつた。しかしデブスにはデ・レオンにおける貴重な觀念—党規律の厳正さ—が欠けていた。デブスとデ・レオンが一緒に協働したら互に欠陥を補ひ合つただろうと Herreshoff はいう。「デブスに出来ることは私には出来ない。私に出来ることはデブスには出来ない」というデ・レオン自身の言葉は Herreshoff が言うように「簡潔に述べられた簡潔な真理の美しさを持つている」⁽⁴⁷⁾。

註1' H. H. Quint, *The Forging of American Socialism*.

Columbia, 1953. pp. 146—7.

2' D. Herreshoff, "Daniel De Leon," in H. Goldberg,

ed., *American Radicals*. N. Y., 1957. p. 205.

3' I. Kipnis, *The American Socialist Movement, 1897-*

1912. N. Y., 1952. p. 22; Quint, op. cit., pp. 173—4;

N. Fine, *Labor and Farmer Parties in the U. S. N.*

Y., 1928. p. 180.

4' Quint, op. cit., pp. 146—7; Kipnis, pp. 23—6, 35.

5' W. Z. Foster, *History of the Communist Party of the*

U. S. N. Y., 1952. p. 81; 3. K. Эрберг, "Даннэль Де-

Леон-идеолог Анархо-синдикализма в Американск

ом рабочем движении," Из истории социальнo-

Политических идей-Сборник статей. Москва, 1955.

p. 680.

6' デ・レオンのセクト性と教条主義を「最も矛盾に満ちた評価

の対象」たる彼の個人的性格から理解せんとする傾向も強い。

確かに彼の「独特の性格から惹起された愛憎の流れ」は著し

いものがあり、彼をめぐる抗争は部分的には彼の個人的気質

の結果だつたということは認めねばなるまい。しかし彼の気

質は「信条に固執する厳格に非妥協的なやり方」に表明さ

れ、彼が常に原則を問題としたのである以上、彼の活動は「

彼の社会哲学の論理的表現」として把握されるべきであらう。

尤も彼に攻撃された者はその攻撃を「かかる高い平面では理

解しなかつた」のむねもある。 Quint, op. cit., pp. 145—6;

Эрберг, op. cit., p. 678; W. J. Ghent, "Daniel DeLeon,"

in *Dictionary of American Biography*, V., pp. 222—4;

P. F. Brissenden, *History of the I. W. W. N. Y.*, 1920.

pp. 238—9; L. Fraña, "Daniel De Leon," *The New*

Review, July 1914, p. 391, cited in *Ibid.*, p. 239; Hill-

quit, *Loose Leaves from a Busy Life*, p. 46, cited in

D. Bell, "Background and Development of Marxian

Socialism in the U. S." in Egbert and Persons, ed.,

Socialism and American Life, I. Princeton, 1952. p.

246.

7' Mark Perlman, *Labor Union Theories in America*,

Evanston, 1958. p. 78. ①の十原則とは①「間に合わせ」

改良の嫌悪②無情なまじに論理的なプログラムに対する信頼

③姑息手段の回避④新しい革命的な社会的価値の採用⑤全め

るブルジョアの慣習の完全な破壊⑥革命的指導者のみへの依

存⑦全ゆる Sop の回避⑧レトリックの不信頼⑨使命がかく

されることによつて失われることがないように秘密のよりも

公開の議事⑩労働者の側における短期的不信頼の如何に拘ら

ず、プロレタリアト及び革命的目的の正しさについての誤り

なる信念。

8' Quint, op. cit., p. 144; Egbert & Persons, ed., op.

cit., II. p. 186.

9' 彼が著書 *Marxian Science and the Colleges* にて示

したアカデニズムに対する嫌惡の情 (Egbert & Persons, ed., op. cit., II. p. 220) にも拘らず、彼は S. Perlman の云々「マルクス型インテリゲンチヤの典型」だった。 Selig Perlman, *A Theory of the Labor Movement*. N. Y., 1949, p. 181.

91 Quint, op. cit., p. 143; Anna George de Mille, Henry George. Univ. of N. Carolina Press, 1950. p. 144.

11 M. Hillquit, *History of Socialism in the U. S.* N. Y., 1903. pp. 277—81; P. Foner, *History of the Labor Movement in the U. S.*, II. N. Y., 1955. pp. 146ff; Kipnis, op. cit., p. 21.

12 Quint, op. cit., pp. 142—5.

13 Ibid., p. 156.

14 Hillquit, op. cit., p. 281.

15 人民黨の問題については Quint, op. cit., chapter V & VI; Foner, op. cit., II. p. 304ff; Kipnis, op. cit., p. 14. 労働組合でも濃厚な生産者意識をもつ労働騎士団は人民黨を支持したが、進んだ意識に立脚した A. F. L. は冷淡だったのであり、デ・レオンは「米國社会主義者は人民黨の大統領候補を支持することによつて残りの米國労働者の支持を得ることが出来ようか」出来ない。他のどんな返答も米國労働者の知性と誠実性を侮辱するものである」と言明した。

16 これらの運動に対する彼の「惡意ある態度」の理由はそれらのブルジョア的性格にあった。例えば People, May 2.

1899 における「教會」の Bliss の演説に対する痛烈な批判を見よ。 Quint, op. cit., pp. 125—6.

17 例えばデ・レオン宛 Reinsteins の書翰。 Kipnis, op. cit., pp. 23—24.

81 Quint, op. cit., pp. 217, 246.

61 Kipnis, op. cit., p. 23.

62 Fine, op. cit., p. 201; Quint, op. cit., p. 146; Kipnis, op. cit., p. 23; P. M. Sweezy, "The Influence of Marxian Economics on American Thought and Practice." in Egbert & Persons, ed., op. cit., I. p. 141.

12 Quint, op. cit., pp. 147—8.

27 Hillquit, op. cit., p. 323; Egbert and Persons, "Terminology and Types of Socialism," Egbert and Persons, ed., op. cit. I. pp. 8—9.

23 Hillquit, op. cit., p. 323.

24 D. A. Shannon, *The Socialist Party of America*, a History. N. Y., 1955. pp. 3—7, 42; Egbert & Persons, ed., op. cit., II. pp. 145—6; Kipnis, op. cit., p. 107; W. Z. Foster, op. cit., p. 97. 尚 Shannon に依れば社会黨第一回大会の代議員の大部分は「社勞黨におけるが如きマルクス主義との直接的關係を持たず、實際には極く僅かの者だけがマルクス理論についての非常におぼろげな理解以上のものを持つていたにすぎなかつた。そして社会黨同志は赤い小さな黨員証を除いては殆んど共通のものを持たない strange

bed fellows) であつた。

25' Kipnis, op. cit., pp. 47, 117—22. 右派によれば、社会主義がプロレタリア運動ならば成功の希望はない。プロレタリアートは社会主義に対して成熟していず、大衆は愚かで怠惰な俗物である。無知で絶望的な労働者は暴力と流血で社会主義を達成しようとするだろう。だから富者は、社会党に加入し、社会主義の漸進的開始のために働くことによつて、暴力を阻止する義務を彼らの妻子に対して負うている。そして社会党は「社会革命」というが如き「愚劣な文句と無思慮な標語」を一掃すべきであるとされた。

26' Kipnis, op. cit., pp. 39—41.

27、中央派は彼らが大会社の富だけを社会化する積りだと中産階級に保証し、更に社会主義が窮局的に到来するまでは、党に加入している雇傭主は労組を破壊する権利があると認めた。資本家は社会主義のために投票することによつて彼から期待され得る全てを貢献するが故に、彼は同僚の社会主義者の組合と斗う目的で雇主連盟に加入する完全な権利をもつてゐるというのである。そして一九〇七年のインターナショナル会議席上 Hilquit 派は「恐ろしく他のどこにおけるよりも合衆国においては社会主義は社会のより良い地位にある諸階級から信奉者を得つつある」と自慢した。Kipnis, op. cit., pp. 173—5.

28' Shannon, op. cit., p. 10. 尚 S. Perlman は共産党员と並べてデ・レオンを眞のマルクス型として考えるが、社会党の

主なる指導者はロシアのメンシェヴィキの如く、名のみの革命主義者にすぎなかつたと評価している。S. Perlman, op. cit., p. 181.

29' Herreshoff, op. cit., 205—6. 尚これら両傾向の対立は社会主義の大衆化と運動の拡大によつて必然化する第二インター期の世界的現象だつたことが注意されねばならないであろう。レーニンが社会民主主義者を「ブルジョアシーの手先」と規定し、「議会議院主義化し、日々の社会政策を追求する社会民主主義に対して断固、共産主義を区別することを宣言した」とと同様にデ・レオンは社会民主主義的趨勢の拒絶者として現われたのであり、このことは松下圭一氏も認めておられる。(松下圭一「社会民主主義の危機」中央公論、昭三三年二月号六二頁) 尚社会党の O. M. Johnson はデ・レオンの著書の序文に次の如く述べた。「欧州における所謂社会主義政党的中産階級的・改良主義的性格が、欧州社会民主主義の指導者達から社会愛国者を生み出した激しいナショナリズムに表明された時、世界の何百万という労働者大衆にとつては第二インター、特にドイツ社会民主党の一九一四年八月の全き落第は何か全く信じられ難いものとして激しいショックだつた。米國では社会党の感傷主義と空威張りで育て上げられた何干という自称社会主義者達―彼らはドイツ社会民主党をその指導者と見なすよう教えられていた―は当然、喫驚し、嫌気がさし、遂に社会主義と人間性に全く信頼を失つてしまつた。一九一四—二〇年の……地震によつて足をすくわれも

意氣阻喪もしなかつた唯一の社会主義者——彼らこそ唯一の社会主義者なのだ——はロシアのボルシェヴィキを除いては米国内社会労働党員のみであつた。」又「第二インターの傾向はすでに一九〇〇年米国内社会労働党にはつきり分つてゐた。」と。Daniel De Leon, *Flashlights of the Amsterdam International Congress*, N. Y., 1929. Preface, pp. i—ii.

30 M. Perlman, op. cit., p. 77; Herreshoff, op. cit., p. 207; Fine, op. cit., p. 181.

31 M. Perlman, op. cit., pp. 77—9; Fine, op. cit., p. 182. デ・レオンは云う。「革命的前衛に加入する者は、値切りや掛け合いに対して心を鬼にせねばならず、緩慢な獲得に満足すべきであり、彼の数の比較的少いことを恥じる全ての感情に全く無感覚でなければならず、又政治的或いは政党の成功を得たいとむずむずした感情に駆られてはならない」と。Quint, op. cit., p. 148. 尚この問題は所謂窮乏化理論とも関係し、詳細は別稿にて論ずる予定であるが、此処では次のデ・レオンの語を紹介しておこう。「ここにはテスト——それによつて餌が健全な一歩から区別され、それによつてわなが探知され、更に正しい前進が取られるようなテスト——が存在する。そのテストはこうである。DOES THE CONTEMPLATED STEP SQUARE WITH THE ULTIMATE AIM? これである。もしもそうならばその一歩は健全であり、安全であり、もしもそうでないならばその一歩はわなであり、危険である。」M. Perlman, op. cit., p. 79. 彼

は譲歩を「労働者の足下のバナナの皮」と呼ぶ。Kipnis, op. cit., p. 15.

32 Bell, op. cit., pp. 247—6. 尚、第二インター期の社会主義政党の趨勢は、その力を資本主義制度そのものの廃棄に集中せずして、労働者の日常的利益を擁護しつつ、制度の結果への斗争に局限し始める。この趨勢に反対し、改良の危険性を追求する左派の主張が活発化する。例えばパンネクックは改良を資本家の譲歩として捉え、労働運動にとつて弾圧よりも一層危険なもので、労働者を迷わせ、分裂させ、労働者の政治的活動を常に無力で束の間のみせ改良主義の無力な附屬物に変えることを目的としてゐると説き、レーニンもこれに全面的同意を与え、更にローザも社会主義への「障害は社会改革や民主主義の発展によつて打破されぬばかりか、むしろますます強固になつていく」と述べた。かかる観念は屢々「左翼小児病」を生み出していつたのだが、デ・レオンも典型的な小児病に陥つた訳である。松下、前掲論文、六二頁、レーニン「労働運動における意見の相異」マルクス・エンゲルス—マルクス主義、国民文庫、ローザ・ルクセンブルグ、緒方、沼田訳「改良主義論」希望閣。

33 Shannon, op. cit., p. 11; ハーニン、前掲論文、八六一九頁。尚 Shannon は社会党の目標としていたものが今日でいう「福祉国家」であつたと指摘する。

34 Brissenden, op. cit., p. 94. デ・レオンの Berger's Hit and Misses—Revolutionary Socialism in U. S. Congress,

Parliamentary Idiocy versus Marxian Socialism—社会党國會議員 Berger が彼の地位を社会主義のプロパガンダに利用しないことを非難したものである。Egbert & Persons, ed., II, p. 286.

35' De Leon, Industrial Unionism, N. Y., 1921, p. 2. 一九〇七年のシネチャットガルト・インター大会において Heselwood は社会党を「この投票獲得機關は票を得るためなら、何にでも屈服し、又どこにでも行くだろう」と非難し、「ルーズヴェルト型の trust-buster」たる民主党員 R. Hearst と Hillquit に投票せよというカーンを示しつつ、「Hearst and Hillquit.」社会主義のためなのか、断じて否。「Hearst and Hillquit.」得票のためなのだ。この犯罪的行為は我々の壮大な昔からのスローガン『世界の労働者よ団結せよ』とどんな関係があるのか」と攻撃した。Brissenden, op. cit., p. 186.

36' Kipnis, op. cit., pp. 300, 383; W. Z. Foster, op. cit., pp. 79—82.

37' Foner, op. cit., p. 42; Hillquit, op. cit., p. 214; Egbert and Persons, ed., op. cit., II, p. 141; Quint, op. cit., pp. 141—50; Fine, op. cit., p. 180.

38' Hillquit, op. cit., p. 339; Kipnis, op. cit., pp. 104, 370; Fine, op. cit., p. 204; Quint, op. cit., p. 174; Foster, op. cit., p. 102.

39' Herreshoff, op. cit., pp. 203—4; De Leon, Socialist

Reconstruction of Society. N. Y., 1941, p. 43; Bell, op. cit., p. 215. エンゲルス、「イギリスにおける労働者階級の状態」アメリカ版序文。

40' Kipnis, op. cit., pp. 37, 171—2; Brissenden, op. cit., p. 47; Foner, op. cit., p. 403. 「二つの腕の労働運動」とは「各党員が一方の腕を経済的分野における組合活動に捧げ、他方の腕を社会党を通じての政治運動に捧げつつ、どちらの腕も他方の腕に干渉しない」という理論。

41' Quint, op. cit., p. 146.

42' 以上検討した諸問題を通じて痛感されるのは当時の米國マルクス主義の理論的低さである。デ・レオンの主張は常に一面のマルクス主義上の真理を含んでおり、又他面では誤っていた。そしてデ・レオン批判も常に一面の真理を含みつつも、デ・レオンに原則的に対立することによつて他面では非マルクス主義を含んでいた。デ・レオンには「資本主義と労働運動の生きた歴史の矛盾」——Bell は社会主義の矛盾を “in the world but not of the world” たることあると捉える——を弁証法的に把握することが出来なかつた。従つてデ・レオンの見通しは常に未来に対する期待に依つてゐた。

43' 一九〇〇年以後、社労党は a practical vote-getter として競争圏外に置かれ、又 Sanial & Vogt やらデ・レオンから離れてゐた。Fine, op. cit., pp. 177—9. そつと党勢力の決定的凋落の時期に People 紙は日刊となり「その日以来、党組織の生活は日刊紙を維持する必要性一恐るべき課

題によつて支配された」とH. Kuhn は書つてゐる。Herreshoff, op. cit., p. 207; Fine, op. cit., p. 182.

44' Herreshoff, op. cit., p. 208. 両党の統合は幾度か試みられて失敗に終り、I・W・W・の政治的性格は一九〇八年の分裂によつて否定され、デ・レオン派I・W・W・は又もや孤立した。

45' De Leon, *Socialist Reconstruction of Society*, 3rd repr., op. cit.

46' Haywood も彼との協働を拒絶し「デ・レオンは常に自分が正しいと主張した。彼は彼への献身者を除いては如何なる者にも彼と一緒に働くことを不可能ならしめた。」「デ・レオンの偏見によつて支配された社会労働党はそれが結びつく如何なる運動にも力を惜すことが出来なかつた」と言う。Bill Haywood's Book, N. Y., 1929, p. 222. cited in Herreshoff, op. cit., p. 208.

47' Herreshoff, op. cit., p. 213.

附記—本論文にて使用せるロシア語文献については大学院学生倉崎繁氏の世話になつた。記して謝意を表する。

Daniel DeLeon and the Socialist Labor Party of America.

by T. Nomura

Although Daniel DeLeon (1852-1914) has been condemned by many Socialists, including Leninists, as responsible for the failure of the socialist movement to acquire support of the toiling masses in America, he contributed greatly to the rise of the socialist political movement in the U. S., notwithstanding his sectarian policies and dogmatical understanding of Marxism.

It was under his leadership that the S.L. P. entered the new politically active stage with its presidential campaigns.

The keynote of his leadership was the intention to make the S.L.P. the real vanguard party of the American proletariat and to maintain the proletarian and revolutionary character of the party.

This was the main reason why he rejected fusion politics with the middle class and agrarian reform movements and resisted the growing social-democratic trends in the party.

But, amidst the characteristically persistent and vigorous middle class traditions in the American society, his earnest efforts were destined to fail because of the sectarian character of his policies. Both the isolation of his party and the formation of the Socialist Party as a social-democratic vote-getting machine were made inevitable as the result of his sectarian policies, and the American leftists, including DeLeon; had to develop syndicalistically - inclined ideologies. I think the lack of the revolutionary vanguard party resulted from De Leon's failure was one of the main weak points which led the American socialist movement decline.